‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

56号 1992.11.9
文・編集・発行
恋 怪子

CD: W.A.S.P. "THE CRIMSON IDOL"

(W.A.S.P.というよりBLACKIE LAWLESSのソロ・アルバムといった方がいいかも。)

(東芝EMI ¥3.000)

このCDの歌詞カードにはBLACKIE LAWLESSのナレーションが書かれてあって日本語に訳されてはいないのだけどわかりやすい英語なので一気に読めた。英語はわかりやすくても内容はヘヴィ。聴きはじめたときは、「はじめからおわりまで全然気の安まるところがない」と感じて、しばらくのあいだはあまり熱心には聴けなかったわけだが、このナレーションを読んでわかった。

ナレーションにはジョナサンというロック・スターの生涯が曲と相互に関連しあうように書かれてある。「万人の目に映るクリムゾン・アイドルになりたい」と願った少年ジョナサンが「万人の目に映るクリムゾン・アイドルにはなりたくない」とステージの上で万人の目の前で自殺をする。「愛だけが俺を解き放ってくれる」と歌って。なぜジョナサンはクリムゾン・アイドルになりたかったのか、そして、なぜクリムゾン・アイドルになったのに死ぬことになるのか。ナレーションを読んで曲をきくとそれがわかる。人間を生かすものはなにか。人間を殺すものはなにか。ジョナサンの求めていた愛とはなにか。それがわかる。

W.A.S.P.の日本公演、11/21新宿厚生年金、12/4幕張チッタ、11/3腐男倶楽部ホール

WORDS: ロビー・ロバートソン

「ザ・バンドはとてもうまくいっていたよ。成功するまではね」

「でも、奇妙な現象が起きてきたんだ。病のようにね。創造的な作業じゃなくなっちまった。人生の一側面しか見られなくなって、何だかすまないような気持ちだったよ。じっとひとつの場所にとどまって犬と遊んだり……そういうことがしたくなった。誰かに『今何をしてるの?』って聞かれたとき、『何も』って答えたくてたまらなかったんだ」

「言うべきことが何も見つからなかった。まわりを見ても、同じように言うべきことのないやつらばかりだった。それなのに、やつらはレコードを作り続けてきた。『俺はそんなことはやらないぞ』って思ったんだ。レコードなら、もう100枚も作った気分だったね。『空気を入れかえて、しばらく何か違うことをやるんだ。そうすれば、いつかまた何か感じるものがあって、レコードを作るかもしれない。またはニ度とレコードなんて作らないかもしれない』って思った。

ロビー・ロバートソン(「Switch」1988年4月号より)

4年半ぶりで「ラスト・ワルツ」(ザ・バンドの解散ライブの映画)を銀座シネパトスのレイトショウで観た。前に見たときはちっともいいと思えなかったボブ・ディランを今回はとてもいいと思った。それは、しばらく前に吉祥寺のバウス・シアターでボブ・ディランの初期のロンドン・ツアーの映画「DON'T LOOK BACK」を観たからだと思う。「DON'T LOOK BACK」でボブ・ディランの背景というか、バックボーンというか、それを感じとれたから。

ラモーンズ

BOOK:「僕はランチにでかける」 間章(あいだ・あきら)著

OAK BOOKSシリーズには同じ著者のジャズ・エッセイ「この森に終りはない」もある。¥1.800

柏書房 OAK BOOKS ¥1.800

「ロック・エッセイという副題につられて本屋でこの本を手にして頁をめくると「マーク・ボラン、彼こそはわれわれが今日持つことができた類いまれな天才の一人である。そして天才とはいつも己れの地獄をかかえた唯一無二の存在である。」という文にぶつかった。あ、すごいな。ロックをこういうふうに書く人が日本にもいるんだ。

この時は読むのがこわい気がして買わずにいたけど、3日ほどしてやっぱり読んでみたくて買いに行った。買ってすぐにコーヒー屋に入って目次を見て「パンク・ロック論のための覚書」の章を読みはじめた。そうしたら一章全部ドラッグの話。あいまにブニュエル、ベルトリッチ、ルー・リード、パティ・スミスのことがちらほら。うーん、この著者ってどんな人なんだろう? 家に帰ってから年譜のところを見た。そうしたら「間章関連事項の'78のところに「12月12日、東京渋谷にて死去」とある。「えっ!うそ!」と思わず声が出て、本をパタッと閉じてしまった。何日も本を開かなかった。

気持ちが落ちついて読みはじめた。アンダーグラウンドを漂流しつづけた著者を失った。

みえるこのパンク・ロック現象は本質的にロックをロックへ送り返し、ロックの己が姿と出会わせるフィード・バックのムーヴメントなのである。プログレッシヴとアヴァンギャルドとは異なるロックの革新再生のひとつの道と方法、そしてもうひとつの局面がここにある。パンク・ロックを考える上で決して見逃してはならないものがこの局面なのだ。ロックある。幻影と悪夢とパワーよ、もう一度というのでは単にない。確かに私はテレヴィジョンやスーサイドに毒を悪夢を見る。しかしその毒はロック自体にもそしてロックの未来にも向けられた悪意でこそあるのだ。パンク・ロックを注意深く聴きつづけると、そこに明るさと純粋さとともに見えるのはこのロックの現在〈かかえている空しさ〉であり、凶々しさであることが分かるだろう。例えばイギリスのDr.フィールグッドの音楽の底にある悲しさや空ろさは決してノスタルジーだけによるのではなく、それはパンク・ロックが有しているもの、それはロックの現在のありようとロックの歴史に対するこのアイロニーの力だといえるだろう。

だからこそ私はうれしさやなつかしさ、そして夢のなごりへの期待とともに〈寒さ〉を〈空ろさ〉を、そしてアイロニカルなものをパンク・ロックに感じてしまうのだ。かつてルー・リードが「ロックンロールは危険なものであり、有毒だ」と言ってから長い月日がたった。そして今パティ・スミスが「ロックとコミックがもっともすばらしいもの」と言う、この遠い目にあるアイロニカルな時の顔を私たちは決して見逃してはならないはずだ。

パンク・ロックの新しさ、そして局面は、この決して定かには見えぬ〈時〉の願とその〈時〉が育んだ内実、つまり今日のロックを探してすべての者が廃墟と砂漠を迷っているという負性のうちにある。

そしてパンク・ロックはまさに過程の音楽、現在進行形のロックなのだ。パンク・ロックは今まで作りあげたロックの建築物を放棄した。テクノロジーとメディアとスタジオをそれが本来始まったところのものへ送り返した。そしてロック自体を彼らの見はてぬオリジンへ送り返した。しかし戻るところなど実はどこにもない。同じように始め同じことをくり返すことなど決してできないのだ。そこにひとつの荒野がひらける。ペシミストとオプティミストとニヒリストと夢いだく者、アナーキストとドロップ・アウトの混在した〈荒野〉と〈現在〉がひらける。そしてこの〈荒野〉と〈現在〉にあっては自覚しようとしまいと、そう望もうと望むまいと一人一人が心さびしい一人一人のゲリラたちなのである。

「パンク・ロック論のための覚書」より。

この三年間に私は五度パリとロンドンとニューヨークへ行った。そしてたまたまパンク・ロックといわれるものの隆盛をまのあたりに見てきた。マーキーやデンゲウォールスやCBGBやマクシズ・カンザス・シティで五十くらいのバンドを聴いてきた。そして私は久しぶりに血のさわぐのを感じたものだった。しかしそれは断じてパンク・ロックにロックに未来を感じてのことではなかった。私はさまざまのパンク・ロック・バンドがまさに未来を壊し、失くしているほどにやけっぱちで、がむしゃらで、アナーキーなことに感動したのだった。私はパンクが未来に背を向けるでもなく、「そんなこと知らねえ」というように存在していることに喜びを覚えたのだった。確かにそれはまたとなく新鮮な喜びであり感動であるに違いはなかった、と最初に行ったときには感じたものだ。再度ロンドンやニューヨークをおとずれたときはまるで違っていた。パンクはただのファッションとなってしまい、ただ風俗的なパンク・バンドがやたらと多くなっていたからだ。去年の秋セックス・ピストルズが解散したとき、旅先でそのニュースを真っ先に聞いて喜んだのは私だった。自嘲しないバンド、亡びず、壊れないロック・バンドなどを決して信じない私は、どんな理由にせよセックス・ピストルズがあっさりとセックス・ピストルズの未来を捨て、まるで食いかけのハンバーガーを投げ捨てるように解散したのはうれしかった。ハート・ブレイカーズもそうだった。ジョニー・サンダーズはこのハート・ブレイカーズのあと、リヴィング・デッドというバンドを組んで、その演奏もパリで聴いたが、そこにはもうあのニューヨークの二十五のアンダーグラウンドなバンドが出演した「ニューヨーク・ロック・パーティ」(七六年五月)のステージで、連中が四人とも一ぺんに違う方向に走りだしてしまうような目茶苦茶な「バイブライン」を演奏したときのすごみがあって、腹をかかえて大笑いするようなアナーキーさはもうなかった。そのパリのスタンドで買ったロック・ペーパーで「セリーヌの時代のパンク・ロック」という記事を目にした。セリーヌとはあの「夜の果ての旅」「なしくずしの死」そして「北」を書いた〈呪われた有毒の作家〉〈敗残の巨人〉のルイ・フェルディナン・セリーヌのことだ。セリーヌはこの十年来私にとって最大の作家だった。あるインタヴューのなかで「私は文体そのものだ。私の書いたものから文体を取ったらあとはくずだ」と言ったセリーヌの小説は、まさにどこにも救いのない苦しみにきしんでいる。それはこの現実こそが無限地獄であり、いずれにせよわれわれは毎日毎日少しずつ死ぬ〈なしくずしの死〉を死ぬことによって生きるしかないというあてのない告発によって満ちている。そのセリーヌとパンク・ロックというのはまさに白日のもとに晒された暗号のようにゴロはよい。確かに私はロンドンやニューヨークでボロくずのようになっているアル中や気違いたちをたくさん見た。どんなにとりつくろっても世のなかは悪くなる一方だという実感をもった。そしてこの現状こそ、ある意味ではあらかじめ壊れたアナーキーなパンク・ロックの登場してきた背景をなすだろう。パンクはくたばるまで目茶苦茶にやるしかないのだ。それゆえに輝かしいのだ。しかしこの一年のあいだにパンク・ロックはビジネスとして成立してきたらしい。今やパンク・ロックによってイギリスの音楽ビジネスは支えられているというのは誰一人知らぬことのないだろう事実だ。消え去ることなく、亡びぬパンク・バンドはもう笑うこともできないジョークだ。日本ではパンクこそロックだとか、パンクこそ未来への闘いだとか、パンクこそロックの可能性をひらくムーヴメントだとジャリ評論家たちがのたまう。トム・ロビンソン・バンドが何、ローリング・ストーンズを目指しているって? 何、ティ・スミスが一万人を集めたって? 笑わしちゃいけない。それこそ〈なしくずしの死〉つまりは退廃じゃないか。それがまるごと、この世のごみために自らはまり込んでいるってことじゃないか。

「アナーキズム遊星群」より。